和書門 類
二〇四三六 號
五八 函
二 架
三二 冊

内閣文庫
和書 類
二〇四三六 號
三二 冊
二六三 函
一五 架

内閣文庫		
番號	和 20436	
冊數	32（14）	
函號	263	43

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集略解

十下

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集巻第十

春雜歌

雜歌七首○詠鳥二十四首（詠鳥哥十三首ヨリシテ、打靡春去来者の哥ヨリ下十一ハ雪のうた也、されハ詠雪の標を落せるにて、ここに廿四首とせるハ誤也）○詠霞三首○詠柳八首○詠花二十首○詠月三首○詠雨一首○詠川一首○詠煙一首○野遊四首○歎舊二首○懽逢一首○旋頭歌二首○譬喩歌一首

春相聞

相聞七首○寄鳥二首○寄花九首○寄霜一首○寄霞六首○寄雨四首○寄草三首○寄松一首○寄雲一首○贈蘰一首○悲別一首○問答十一首

夏雜歌

日本政府圖書
淺草文庫藏書
国立公文書館 National Archives of Japan

詠鳥二十七首○詠蟬一首○詠榛一首○詠花十首○問答二首○譬喩一首

夏相聞

寄鳥三首○寄蟬一首○寄草四首○寄花七首○寄露一首○寄日一首（今本日を目ニ誤れり）

秋雜歌

七夕九十八首○詠花三十四首○詠鴈十三首（詠鴈三首とありて次ニ遊羣十首と標せり八此遊羣二字ハ雁の哥の中の末句の詞なるを誤りて本文の此二字のみを別ニ書出せしより同類なるものと改つ）○詠鹿鳴十六首○詠蟬一首○詠蟋蟀三首○詠蝦五首○詠鳥二首○詠露九首○詠山一首○詠黄葉四十一首○詠水田三首○詠河一首○詠月七首○詠風三首○詠芳一首○詠雨四首○詠霜一首

秋相聞

相聞五首○寄水田八首○寄露八首○寄風二首○寄雨二首○寄蟋蟀一首○寄蝦一首○寄鴈一首○寄鹿二首○寄鶴一首○寄草一首○寄花二十三首○寄山一首○寄黄葉三首○寄月三首○寄夜三首○寄衣一首○問答四首○譬喩歌一首○旋頭歌二首

冬雜歌

雜歌四首○詠雪九首○詠花五首○詠露一首○詠黄葉一首○詠月一首（今詠の字を脱せり）

冬相聞

相聞二首○寄露一首○寄霜一首○寄雪十二首○寄花一首○寄夜一首

春雜歌

久方之天芳山此夕霞霏霺春立下

ひさかたのあめのかぐやまこのゆふべかすみたなびくはるたつらしも

そろゆうけし

巻向之檜原丹立流春霞欝之思者名積米八方

まきむくのひばらにたてるはるがすみおほにしおもはばなづみこめやも

是ハ意ハ歳お同え。意あハ松のしきといふ序なくさそて下の心ハおぼつかな

ふ思ふべし況さまらんやいふこ

古人之殖兼杉枝霞霏霺春者来良之

いにしへのひとのうゑけんすぎがえにかすみたなびくはるはきぬらし

これもよのつぎてきく山の松ちかるべし。古への人のうゑけんといふ事鏡

さるといふのミ

子等我手乎巻向山丹春去者木葉凌而霞霏霺

こらがてをまきむくやまにはるされば このはしのぎてかすみたなびく

こらがてを枕詞。まきむく山のはるになれば木の葉のあひをしのぎてかすみのたつ

玉蜻夕去来者佐豆人之弓月我高荷霞霏霺

かぎろひのゆふさりくればさつひとのゆづきがたけにかすみたなびく

かぎろひの、さつひとの枕詞。弓月がたけは大和城上郡也

会朝去而明日者来牟等云子鹿丹旦妻山丹霞霏霺

けさゆきてあすはきなんといふこのに あさづまやまにかすみたなびく

けさゆきてあすはきなんといひし妹がことばのあさといふをうけてあさづま山にかすみのたなびく

めぐるにあさ妻山とつゞけたり、あさ妻の詞もかへし、あさづまといふべし

天武紀九年九月癸酉朔辛巳幸于朝嬬云々。仁徳紀の詞に阿佐豆麻能避

箇能烏瑳箇烏云々。又姓氏録太秦宿祢の先祖を、大和朝津間腋上地に居

らしむるなどいふ、大和葛上郡也、近江国にも同名あれどおなじ

子等名丹関之宜朝妻之片山木之爾霞多奈引

こらがなにかけのよろしきあさづまのかたやまぎしにかすみたなびく

関をと開に隠れて、名を妻といふ、妻のよろしき

いもとかけてあさづまといふ

右柿本朝臣人麻呂歌集出

詠鳥

打霏春立奴良志吾門之柳乃宇禮爾鶯鳴都

うちなびくはるたちぬらしわがかどのやなぎのうれにうぐひすなきつ

うちなびく枕詞、霏とかきたれば、春のきたるしるし

めであやしまれる一つ

喙ヲ啄ニ誤

梅花開有崗邊爾家居者乏毛不有鶯之音

うめのはなさくをかのべにいへをればともしくもあらずうぐひすのこゑ

六帖にハいへしあれバともしくハいへれバとしてあれバ出てあるをりの例ニ也

しきハまれなるなり

春霞流共爾青柳之枝喙持而鶯鳴毛

はるがすみながるゝなへにあをやぎのえだくひもちてうぐひすなくも

霞のたなびくが水の流るゝごとくみゆるなれバ春のかすみながるゝとよみたると

よみされど、こハなへとよむところなり、鳴ものハかものを、巻十二に鶯の

ほとゝぎすそなへてとよめり

吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀爾

わがせこをなこせのやまのよぶこどりきみよびかへせよのふけぬとに

大和の巨勢山となこせといひかけたり、巻十二にこちごせ山とよめりとハ表裏にて、

わが方より帰る夫とまち山とこさしめずてかへせよといふなり、夜ハ借字、

よびかへる詞也、刀尓ハ継體紀にうらうら手魔伊禰矢度伴といへるに同じく、刀尓ハ

時尓の略也

朝井代爾来鳴杲鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

あさゐでにきなくかほどりなれだにもきみにこふれやときをへずなく

ゐでハ堰なるよしいへり、されどこゝハ堰といふべくもなし、たゞ郷の狩

ものゝ下ゆ朝戸出之とよめる歌あれバこゝハ井ハ戸の借字にて、あさとで

にあるべし、杲音高にかほのこゑなるかほどりハかほる歌に吠ゆる時鳴

ハかほやまとして頻に鳴といふ、きこえたるをかほかほと鳴くよし、かほどりなれバかほ

頻に鳴るといふなり

冬隠春去来之足比木乃山二文野二文鶯鳴裳

ふゆごもりはるさりくればあしびきのやまにものにもうぐひすなくも

在ハ去ノ誤

紫之根延横野之春野庭君乎懸管鶯名雲

むらさきのねはふよこののはるのにはきみをかけつゝうぐひすなくも

仁徳紀十年冬十月築横野堤、神名帳河内国渋川郡横野神社あれバこの内

なり、二の句ハそのところのさまをいへるのミ、かけつゝハおもひて君をいひかけつゝ

いつゝ鳴ものもかものを

春之在者妻乎求等鶯之木末乎傳鳴乍本名

はるされバつまをもとむとうぐひすのこぬれをつたひなきつゝもとな

在ハ本去とあり、元暦本并古本吹下ニ作ル、春之在者よめり、こゝあと得れバさ

となりと云てかくハかけるよし、木末ニ此ニ在てハよむべけれど、朋字ハ去ハもなべてこゝ

まとあれバうぐひすかけれハ聞まじ、鶯のつまからむとてもとなき

かさゝてこそ

春日有羽買之山従猿帆之内敝鳴往成者孰喚子鳥

居ノ下之ハ者ノ誤

米ハ来ノ誤

かすがなるはがひのやまゆさほのうちへなきゆくなるハたれよぶこどり

羽易の山とよめり、さほを猿帆とかけるハ、和名抄下総猨島佐之万よこの例之

不答爾勿喚動曽喚子鳥佐保乃山邊乎上下二

こたへぬになよびとよめそよぶこどりさほのやまべをのぼりくだりに

登降をこれハよみの説去　おもしろきよみ、二そまく　かくよむる説

まゝよしとらつかう

梓弓春山近家居之續而聞良牟鶯之音

あづさゆみはるやまちかくいへをれバつぎてきくらんうぐひすのこゑ

居之の之ハ者の字と得わるまじと定むべし

打靡春去来者小竹之米丹尾羽打觸而鶯鳴毛

うちなびくはるさりくれバしのゝはにをはうちふれてうぐひすなくも

うちなびく枕詞、さて小竹之米をあまた例、小竹群のうへ、元暦本并米を来ま

似たるハ、このうたに例り、巻十二小竹之上尓きゐてなくとりとしみればみれバ、ホ
とゝのふるべし、觸ハ借字にて振也、ちるにものもいかなのそ
朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山従喧渡所見
あさぎりにしぬゝにぬれてよぶこどりみふねのやまゆなきわたるみゆ
之唐本怒ゝを努ゝと作。しぬゝハ次下に小竹野尓所沾而とあり、しのゝをしぬぎとも
同じく、之篠をしぬといふ。小雨そゝぐはそゝぐにおなじ、みふねの山ハ
吉野にあり。既にいひ、巻十三に二所に有。同じく次の歌より春雪とよめれバこゝ
ニ詠雪とあるべきを落たるなるべし
打靡春去来者然為蟹天雲霧相雪者零管
うちなびくはるさりくればしかすがにあまぐもきらひゆきハふりつゝ
てをきらふハ雲の霧もとつもり、雪ふるなり。しかすがにハいひ、さるものから
しかるものハ、しかりながら、さるものゝすがたにいへり、既に出

梅花零覆雪乎褁持君爾令見跡取者消管
うめのはなふりおほふゆきをつゝみもてきみにみせんととればけにつゝ
梅花咲落過奴然為蟹白雪庭爾零重管
うめのはなさきちりすぎぬしかすがにしらゆきにはにふりしきりつゝ
梅ハさきちりしとおもふを、しかしながら雪ハこれねく降といへる
今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎
いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりにしものを
もゆるの語をもえてよめるにて、かぎろひハ巻一に既出
風交雪者零乍然為蟹霞田菜引春去爾来
かぜまじりゆきハふりつゝしかすがにかすみたなびきはるさりにけり
巻五に多き風まじり雨の降夜の雨まじり雪のふるよハとよめりし
山際爾鸎喧而打靡春跡雖念雪落布沼

やまのまにうぐひすなきてうちなびくはるとおもへどゆきふりしきぬ

峯上爾零置雪師風之共此間散良思春者雖有

をのうへにふりおけるゆきしかぜのむたこゝにちるらしはるにはあれども

雪しのしハ助辞、むたハともにといふ詞なり

右一首筑波山作

為君山田之澤惠具採跡雪消之水爾裳裾所沾

きみがためやまだのさはにゑぐつむとゆきげのみづにものすそぬれぬ

ゑぐハ巻十一にも山沢田泉具(ヱグ)ともよみて、本国にてハ与古(ヨゴ)といひ、ちかく人

ハゑぐといへり、葉ハ蘭に似てちさく、根ハ白くふき芋のごとく味ありて

小児などくひぬるとぞ、精しくハ考の別記にあり

梅枝爾鳴而移徙鶯之翼白妙爾沫雪曽落

うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる

うつろふハ木傳ひてうつりあるくなり

山高三零来雪乎梅花落鴨来跡念鶴鴨

やまだかみふりくるゆきをうめのはなちりかもくるとおもひつるかも

一云梅花開(サキ)香(カ)裳(モ)落(チル)跡

ちりかものかもハ疑辞、末のかもハ哉之

除雪而梅莫戀足曳之山片就而家居為流君

ゆきをおきてうめをなこひそあしびきのやまかたづきていへゐせるきみ

右梅のちるかもとよめるハ梅とまがへるハ雪とし、ゆきかへ

として、雪をおきてうめをこひそとよみて、しなのれと答ふべし、山かた

つきてハ山によりてといふ、まへにはけつきて、まちのへは行つきて

ともよめり

右二首問答

詠霞

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾来

きのふこそとしハはてしかはるがすみかすがのやまにはやたちにけり

巻九吾船ワガフネ将極ハテンとよめるをもてみれバ、こゝもとしはてしとよむべし

寒過暖来良思朝烏指滓鹿能山爾霞軽引

ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがのやまにかすみたなびく

寒暖朝烏ハ義をもてよめり、朝日さし出たる山の意をとりてよめり

鸎之春成良思春日山霞棚引夜目見侶

うぐひすのはるになるらしかすがやまかすみたなびくよめにみれども

鸎ハまださかりならねど、そのまゝつけたりの白まく句を切て

さて夜見れどもといへる第一句末為る事つかゝバ意きこゆるらしと訓べし、

いづれまれよむべし

詠柳

霜干冬柳者見人之縵可為目生来鴨

しもがれしふゆのやなぎハみるひとのかづらにすべくもえにけるかも

霜干を十ヨ讀れて見ハ良のうつの誤にて、よきひとのちるべしと為の

いたれき

浅緑染懸有跡見左右二春楊者目生来鴨

あさみどりそめかけたりとみるまでにはるのやなぎはもえにけるかも

縷く然サヽ乳也

山際爾雪者零管然為我二此河楊波毛延爾家留可聞

やまのまにゆきハふりつゝしかすがにこのかはやぎハもえにけるかも

青やぎとしいへバかハやぎもよむべし

山際之雪不消有乎水飯合川之副者目生来鴨

やまのまのゆきハけざるをみなぎらふかハのそへれバもえにけるかも

水のおとの高きをいふべし水飯合にも見べし飯ハ激の字の誤なるべし
こちぎらふ六瑳にむ川のそへれバ往にいかなる山がハのそひ柳もえて柳ハ春となりてかへる
なるのとよめる八瑳のひらに思ハいかにして二首とも見えてよめる
の村なにくるのとよめるもあり俗集にもあり

朝旦吾見柳鸎之来居而應鳴森爾早奈禮

あさなさなわがみるやなぎうぐひすのきゐてなくべくもりにはやなれ

森字もりとよむ木多繁くもり字鏡森木長貌伊与之加尓

青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令視子裳欲得

あをやぎのいとのほそさをはるかぜにみだれぬいまにみせむこもがも

絲乃細紗ハ緑乃細絲とあるしう佳侶ら来たるべ乙女のいとのる例べし
其いそれきまなくし伊間の伊ハ助辞なく不亂間なく

百礒城大宮人之蘰有垂柳者雖見不飽鴨

もゝしきのおほみやひとのかづらけるしだりやなぎハみれどあかぬかも

かづらけるハかづらにせるなり柳をかづらとすることハ前にいへり

梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞

うめのはなとりもちみればわがやどのやなぎのまゆしおもほゆるかも

柳を眉に似たるによりて梅を取もちてみるに今宿の柳をおもひやりて柳の眉を合せることは

詠花

鸎之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴

うぐひすのこづたふうめのうつろへばさくらのはなのときかたまけぬ

うつろふハ散をいへり枝にうつるなりを梅をさかへて此すなわち桜のうつろふ
片まけハ既に来

櫻花時者雖不過見人之戀盛常今之将落

はなざかりなるときハあらそひて、みる人のこひのさかりのねにハいまちるらん
落花したるにハおしねども、人のめづるさかりなるにてちるらんとなり、古今集
ちりぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時のおもひでにせん、ちりて
ひさしからずとも、人の心にのこるこひのまなれバ、かくて世中をすてのちもわすれざ
よまれたるなるらん

我刺柳絲乎吹乱風爾加妹之梅乃散覧
わがさせるやなぎのいとをふきみだるかぜにかいもがうめのちるらん
集中刺柳とよみて柳ハ枝を地にさし刺てよく生るものなれバかく
いへり、妹がかきの梅をよみ侍るなり

毎年梅者開友空蝉之世人君羊蹄春無有来
としのはにうめはさけどもうつせみのよのひときみしはるなかりけり
巻十九番住ニ毎年謂之等之乃波とあり、君ハ吾の字の誤にてよのひと

われしはなるべし、梅ハまてどもさけども、現身の人なる吾ハ梅のさかりに逢
がたき時を得ぬと歎くなり、羊蹄をしのかなに用ひたるハ既にいへり

打細爾鳥者雖不喫縄延守巻欲寸梅花鴨
うつたへにとりはくまねどしめはへてもらまくほしきうめのはなかも
うつたへハひたすらの意にて、鳥の梅の花をくふにハあらねども、人に折らるゝ
ことハおそれぬものゆゑしめはへてよまれたり

馬並而高山部乎白妙丹令艶色有者梅花鴨
うまなめてたかのやまべをしろたへににほはしたるはうめのはなかも
初句ハ馬を並てとなり、一首ハ友どちつれて、ながめてたのしミのあそびするさま
なるべし、白妙ハ梅と櫻の花の誤にてあるべし、梅ハ白く

花咲而實者不成登裳長氣所念鴨山振之花
はなさきてみはならねどもながきけにおもほゆるかもやまぶきのはな
なかきけとハ、ながき日の事なり、長き日にハ山吹にのみなくてとなるかなとぞく

ちゆふさきてみハなくねどもなのきけばおもほゆるかも。やまがさのちま

山吹の花をなしぬるにハ隠れたるかハ、さらに山吹を、振ハ古の利く伎と在ハし

て侍るか、和名抄に款冬をやまぶきとよめるハあやまれど、或注にもくはしく

見えたり。ちきまさに日久しくて、抄にも出たる女のうけひきてハいまだなきのみをと

えたる證なき旁なるが、まぎれてのこるなるべし

能登河之水底并尓光及尓三笠之山者咲来鴨

のとがはのみなそこさへにてるまでにみかさのやまはさきにけるかも

能登河ハ添上郡なり、春日三笠の二つの山の間を西へ流るといへり。花ハ

桜なるべし、花といはずして咲るとのみいへる集中に例多し

見雪者未冬有然為蟹春霞立梅者散乍

ゆきみればいまだふゆなりしかすがにはるがすみたちうめはちりつつ

去年咲之久木今開徒土哉将堕見人名四二

こぞさきしひさぎいまさくいたづらにつちにやおちむみるひとなしに

久ハ冬の字の誤にて、ふゆきなるべし。集中冬木の梅とも、又冬ハ冬

木の上に雪降るとてよみしのみ、即冬に残せし木のまゝにて、春ハ花に咲と

よひくなども梅の花のまゝに桜にても去年の花咲しを、冬木とやまわ

さると、今又春に咲といふことも見るべし。また之久木と字をも久木

の誤かく、こぞさけるさくらいまさくこのひづれまし久木にハ冬木うつりさくと

前のそれ等

足日木之山間照桜花是春雨尓散去鴨

あしびきのやまのまてらすさくらばなこのはるさめにちりゆかむかも

散の上将の字落しこの

打靡春避来之山際最木末之咲往見者

うちなびくはるさりくればやまのまのもつともすゑのさきゆくみれば、とほきこゑぬれあざさきぬるされば

岑ハちかづく春来良之山際遠木末のさきゆくみれば今日ふのま
まだしとも最をとりきし訓べし

春鴙鳴高圓邊丹櫻花散流歴見人毛我裳

きゞしなくたかまとのべにさくらばなちりてながらふるみむひともがも

ながらふるハながるゝを延いへり、又散をとるべ

阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二

あぼやまのさねきのはなハけふもかもちりみだるらんみるひとなしに

阿保山ハ山城の山なり、伊賀国とふあり、阿保氏の出し地なるべし
佐宿木ハ卷十三作楽花としあるとおもへバ、ここも作楽の二字あるを、
佐宿木三字にて訓つらん、さくらのきなるよしもおもしるべし

川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花曽置末勿勤

かハづなくよしぬのかはのたぎのへのあしびのはなぞおくなまれきさ

る醉木既にいへり、結句ハすゑに解ざるく訓ますらばしハおくなかれといふなり
の花ぞすゑにおくなれとゆめとよくべバ、置ハ觸の字の誤、末ハ手の字
の誤にて、てにふれそゆめと訓んにあしびの花をとりてかざしにあ
るとあるハそれさ、宜もなく花をのをとしバゆへえらで、曽ハ者の誤なるべし、
又勿ハ莫とゆくゆめといへる例なりゆめと云訓ハ必しも勿とかなはねど、前
ハ改めて入れしるなのく、又或人ハ末ハ土の誤にて、つちにおくなゆめと訓べし
といへるもいつれか穏かるべし

春雨相爭不勝而吾屋前之櫻花者開始爾家里

はるさめにあらそひかねてわがやどのさくらのはなハさきそめにけり

花をさきて嬉しきもの、まちのは、ほころびてさくを、ねがふとするハ季一相格

春雨者甚勿零櫻花未見爾散巻惜裳

はるさめハいたくなふりそさくらばなまだみぬにちらまくをしも

さくらあはれとよめる例之

はるさめハいたくなふりそさくら花いまだみなくにちらまくもをし
春去者散巻惜櫻花片時者不咲含而毛欲得
はるされバちらまくをしきさくら花しばしハさかずふゝみてもがも
ふゝみハつぼみ也、花をゝしむ餘りにかくハいへり、櫻一本梅とあり
見渡者春日之野邊爾霞立開艶者櫻花鴨
みわたせバかすがの野べにかすみたちさきにほへるハさくら花かも
何時鴨此夜之将明鶯之木傳落梅花将見
いつしかもこの夜のあけんうぐひすのこづたひちらす梅の花みん
夜のあけるを待て梅花をみんとて鶯の鳴るを待なり
詠月
春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾
はるがすみたなびくけふのゆふづくよきよくてるらんたかまとの野に

三伏一向とあるハいと心得がたし、翁ハ三夜伏いねて一夜ひとりの心をさとりて
かくれバ、宵の夢月をいふべし、さる義をもて暮三伏一向夜をゆふづくよ
と訓ることハいわれつれど心得がたし、猶よく考へてん、巻十三根てころく
とある一伏三向とあるを、こハころといふべし、これと思ひ合へバ、松をもあれの
うらにて依るなり
春去者紀之許能暮之夕月夜欝束無裳山陰爾指天
はるされバきのこのくれのゆふづくよおぼつかなしも山かげにして
一云春去者木陰(コガクレ)多(オホキ)暮月夜
このくれハ木之暗なり、木陰のくらき也、一説くれおほき、木陰の
ちぐれおほきにてのせらる也、木のこのくれハ言葉なれバ一説のこゝろ
おほきのことをいるべし、おぼつかなしものしハ助辞
朝霞春日之晩者従木間移歴月乎何時可将待

あさがすみかゝるひのくれハこのまよりうつろふつきをいつとかまたん

右哥ハ一二の句ハ春日の霞をたなびくをいふくれの詞ハこのくれるを
いふ同じく春の夜のくらき時分といふ事を云、夜のくらき時分より
夜までのまち久しきよしをいふなりくれの詞を日の暮の事とみて八一をよみ
ぐしくれハのハを濁るハわろし

詠雨

春之雨爾有来物乎立隠妹之家道爾此日晩都

はるのあめにありけるものをたちかくれいもがいへぢにこのひくらしつ

春の雨ハ降出てやまぬものなるをかねてしらずしてめの降るに道すがら
雨やどりをして妹が家までもゆきつかでたゞひのくれぬる

詠河

今往而聞物爾毛我明日香川春雨零而瀧津湍音乎

いまゆきてきくものにもがあすかがはゝるさめふりてたぎつせのおとを

聞ハ聞の字、末句ハたぎる瀬の音をいふ

詠煙

春日野爾煙立所見嬬嬬等四春野之菟芽子採而煮良思文

かすがのにけぶりたつみゆをとめらしはるのゝうはぎつみてにらしも

和名抄莪蒿於八木ハ俗にいふよめがはぎといふなり、巻二にもみえし八
煮らしと云

野遊

春日野之淺茅之上爾念共遊今日忘目八方

かすがのゝあさぢがうへにおもふどちあそぶけふのひわすれめやも

巻十七にてわれハこひんなど見えしのはすゝのうへにてあそびし日なと

春霞立春日野乎往還吾者相見彌年之黄土

はるがすみたつかすがのをゆきかへりわれはあひみんいやとしのはに

あひみんは友にあひみんなり、黄土は借字、としのはは此方にて毎年といふことをくに

いふなり

春野爾意將述跡念共来之今日者不晩毛荒粳

はるのゝにこゝろやらんとおもふどちきたるけふはくれずもあらぬの

將述こゝろやらんとはうさをはらすなり、述は力て遣るといふの語なるべし、ちた

集ちかまし、此処にゝとのぶましとよみ侍るも心をのべなどよまれど、

此ものはさをあらし、あらねはあれすしと訓り、粳ハ糠の誤り

百礒城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有

もゝしきのおほみやびとはいとまあれやうめをかざしてこゝにつどへる

もゝしきの枕詞、あれやはあれぞやの略、あれやとはあれぞやとよむべし

歎舊

冬過春来者年月者雖新有人者舊去

ふゆすぎてはるしきぬればとしつきはあらたなれどもひとはふりゆく

此上あらたまれどもとあれど、契沖のいへるごとく、有の字あまれるなる

なれどもとよむべし

物皆者新吉唯人者舊之應宜

ものみなはあらたしきよしたゞひとはふりぬるのみしよろしかるべし

右のうたとこれと二首までひとをたゝへめでたるうたなり、尚書盤庚上曰、遅任有言人

惟求舊器非求舊惟新とあるによりてよめるなるべし

懽逢

住吉之里得之鹿齒春花乃益希見君相有香聞

すみのえのさとゆきしかばはるはなのいやめづらしききみにあへるかも

掛る得ハ紛の字のさまに従はれるに、赤見とめづらしとよめるハよみ紀と
引くらべり

旋頭歌

春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見

かすがなるみかさのやまにつきもいでぬかもさきやまにさけるさくらのはなのみゆべく

おなじく八例の[illegible]よりしもおぼつかなし佐紀山ハ添下郡

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野邊之鶯鳴烏

しらゆきのつねしくふゆはすぎにけらしもはるがすみたなびくのべのうぐひすなきぬ

うぐひすの[illegible]ハ阿之鳥一本焉に作る

譬喩歌

吾屋前之毛桃之下爾月夜指下心吉菟楯頃者

わがやどのけもゝのしたにつくよさししたごゝろよしうたてこのごろ

桃の實ハ毛のあるをもてけもゝといふ[illegible]毛桃と[illegible]

桃のもとに月のかげのさしたるを[illegible]わがわかれ[illegible]

よそへていへり[illegible]下心吉ハ[illegible]心苦きといふべし

上の句ハ下心をいはんための序のことばにて下心苦ハ[illegible]

[illegible]桜に[illegible]べし[illegible]

訓べく[illegible]

と猶其悪事（サガナキコト）不止而轉（ウタテ）安康條侍其大長谷王之御所人等白（マヲシテ）宇多氏物（ウタテモノ）

云王子（ミコ）[illegible]考の[illegible]

春相聞

春日野犬鷽鳴別春益聞思御吾

かすがのぬにいぬるうぐひすなきわかれかへりますまでも。おもほせわれを

大ハ去の字の誤なるべし。此歌の意ハ旅をかくせバ犬の字ハ出の字と改せる
ハあらじ。鶯の去ゆくへ帰る時のなく泣つゝおくりし君が又かへり来まてわすれ
ずと云れむごく別るゝ人と共に春ハかへりくるといふ事なれど。春ニ
あまめつるよし 演春奴といへぬはあれはかへりこんとよむべくそれハ使うくすぐるべし
宣長云、犬ハ友の誤なるべし、かすがのゝ友うぐひすのなきわかれといへり

冬隠春開花手折以千遍限戀渡鴨

ふゆごもりはるさくはなをたをりもちちたびのかぎりこひわたるかも

花のいくらもあるをのびめでゝたをりもちゆく、花をもて来ていとまなく、恋こふる八雑也

春山霧惑在鷽我益物念哉

はるやまのきりにまどへるうぐひすもわれにまさりてものおもはめや

いまへ霧に来りて鶯いつてハ霧の中のうぐひすは、まどへる思ふ迷へるといふ

依咽霧山鶯喩於サ

出見向崗本繁開在花不成不止

いでゝみるむかひのをかにもとしげくさきたるはなのならずばやまじ

むかひのをかハ向の岡なり、もとしげく咲たる花の実になりては、此ハ別本に、幸樹の花ハ
かくしげく咲たるを花に見て、後ハ桃の実の誤なるべし
巻七にもきやしのもの毛桃本繁花のみさきて成らざらめやも、巻十一にも
その室原（ムロフ）の毛桃本繁くいひしものをならずハやまじといへるに大くら同じ
と宣長いへり。演臣云在ハ毛の誤なりとさきたるげにもあるべしといへり

霞發春永日戀暮夜深去妹相鴨

かすみたつはるのながひをこひくらしよのふけゆきていもにあへるかも

春去先三枝幸命在後相莫戀吾妹

はるされバまづさきくさのさきくあらバのちにもあハんなこひそわぎもこ

まへハさきくさのさきく花さくあるれバ、はるされバさかゆくといひつゞけて、さて

さきくさをさきくといはん序とせり、さきくさハ式ニ福草、和名抄ニ 葛 佐木久佐 とあり、つ祥瑞考にくハし、命あらバのちにハ逢んといへり、宝也

ニ先ハ花の後に、花まではさきの序といへり

春去為垂柳十緒妹心乗在鴨

はるされバしだりやなぎのとをゝにもいもがこゝろにのりにけるかも

しだりやなぎハ二のうへのくかれり、和名抄云楊一名小楊 之太里夜奈木 云

とをゝハたわゝに同じくたわむ事といへり、まへハ巻二東人の荷

前のさきのをとるも妹情尓乗尓家留香同、巻十一ニも同じ語あり、妹が

こゝろのうへにのりてといへり

右柿本朝臣人麻呂歌集出 右ハかの七首ハ人まろ家集の歌なり、

さてハ右の下七首の家にあるこの

寄鳥

春之在者伯勞鳥之草具吉雖不所見吾者見将遣君之當婆

はるされバもずのくさぐきみえずともわれハみやらんきみがあたりハ

はるされバとハ春になれバ、和名抄鳥名苑云鵙一名鶪、揚氏漢語云伯勞 毛受

とあり、そのくさぐきハ数説あれどかなへりとして、古事記集御刀之手上血自

手股漏出 訓漏云久伎 とし首子同じくくるハ股下のくきと漏れいでしハさぐて

ぬくとなへしとあり、さくきハそのやまにこもりてそのとくかりて見えぬ

のかくしてかのもずハくさよりて見えねど、ぎハんあてまえやりてあらんとえ

容鳥之間無数鳴春野之草根之繁戀毛為鴨

かほどりのまなくしばなくはるのゝくさねのしげきこひもするかも

巻三ちかゝなゝかりがやのまれくしおほくやまおかもてんいつよそひをしらずの
かゝらひのこふしよあれ、此歌よくよしも、此の歌の意得しいつまでハしげきさ
といへる序之

寄花

春去者宇乃花具多思吾越之妹我垣間者荒来鴨

はるされバうのはなぐたしわがこえしいもがかきまハあれにけるかも

巻十九宇乃花乎令腐(クタス)霖雨(ナガメ)のしくよあれ、うのはなをまちよあるハ、いふかしおほよ
めれば宮ち従ふ四月ごろよりて大やうにまゐらすてちりそとなる、ちらされバ
ゆこのくれあふゆつて四月許といひて、三月まで八さわふで木ハちりげるで、あるら
ちるるハ四五月へといへるぞよし、或説ニ宇の下米の字を接しけるのといへれど、
垣ゆるかいへるも梅ニハ似つかしうねバ攝しけるハむづかしえ、くさしハ巻十
九ニあるるかく腐しむる事く勝して、でなれハしめるすまいふべし

かハ卯花垣を思越るとて、まちをきなしちまかしバ久しく逢ぬをいへり
木の茂ふるさまとらへてよめる之

梅花咲散苑爾吾将去君之使乎片待香花光

うめのはなさきちるそのにわれゆかんきみがつかひをかたまちがてら

巻十八田邊史福麻呂もく歌て哉ふ八香の下花ハ衍文なるべし、巻一ニ
急の清井を見我氏利(ガテリ)とそれ待ハなのぞ待つてがてりハ梅花をいひ
又君の使をも待んとよかねていへる之

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

ふぢなみのさけるはるぬにはふくずのしたよのこひはひさしくもあらん

初句ハ春卯をいへる為のみ、夜ハ借字よく、古くよし訓て下從(ヨリ)のこゝ、かのこ
夜ハ從(ユ)の誤ふそれなるべし、下從ハ下待下心などいふ下のかし、之ハ助辭なり、
葛の下たるを以て下よりといへる序とせり、宮ちゝろ久ハ之の誤なるべく、

こゝろしくしおもんあるべしといへり、今ハまのびよ立つてあへバ逢よきの之しく

稀ちかくといふ

春野爾霞棚引咲花之如是成二手爾不逢君可毋

はるのゝかすみたなびきさくはなのかくなるまでにあはぬきみかも

成ハ爲になるをいふ、よく咲る花の不成ハ不吐とりよ成子同じ、ひとつにあらむ

花咲しころ逢しより久しく、その實になるまで逢はぬと歎くこゝ

吾瀬子爾吾戀良久者奥山之馬醉花之今盛有

わがせこにわがこふらくはおくやまのあしびのはなのいまさかりなり

あしび咲まで、三四の句ハさかりといはん爲の句中の序也、盛ハ戀の甚しきをいふ

梅花四垂柳爾折雜花爾供養者君爾相可毛

うめのはなしだりやなぎにをりまじへはなにそなへばきみにあはむかも

神に佛に手向て逢させ玉へて祈らバ逢んと之佛書ハよくし佛に

佐るといへり、かきる花とんまり、或人花ハ紙の語へよりへり、さくなるべし

姫部思咲野爾生白管自不知事以所言之吾背

をみなへしさきのにおふるしらつゝじしらぬことにていはれしわがせ

咲野ハ諸本に、初句ハ咲しつゝじんとろの枕詞、しらつゝじハしらぬといはんためのこ、

者四をみるべし咲野によする花がつみなどいへり、此歌ハ業平に寄するもおきて、なや世

よいわれとのひて、わがせこをも世の人のおもふことうきすふハあはれとこれふ

るゑ、いはれしと切るゝなるべしといへり

梅花吾者不令落青丹吉平城之人来管見之根

うめのはなわれはちらさじあをによしならなるひとのきつゝみるがね

人の上在の字を補せし、この本ハ之ハ在の誤りのちるべし、がねハ來を加へ、いづ

がを濁るべきを清しせて之の字を用ひたり、梅をただ梅をとなりたに人に

見さんとの心かくて根ゆかしくこのつけて皆おゆるなれバさる事ハあらじ、

なげく人の親姉子をしむべきよしなく、姉を恋またよ人てこそ人の身より出てむ
までハ悲しく人に逢ハせじといふ事なるべし

如是有者何如殖薫山振乃止時喪哭戀良苦念者

かくしあればいかでかうゑけんやまぶきのやむときもなくこひらくおもへば

山吹ハ集中妹に似るものによみて、妹を植へたれバ花と言ふ山吹をうゑてきて
其山ぶきを妹と見て、やまぶきの止間より、やむとハつゞけたり。山吹ハ久止時無
ふるとも妹の名ばかり山ぶきを何おもふ恋なんと悔るゝ

寄霜

春去者水草之上爾置霜之消乍毛我者戀度鴨

はるされバみくさのうへにおくしものけつゝもわれハこひわたるかも

みくさハ真草ニ水(ミヅ)篶も書き、露草を、水の上と借れるのごとし。上ハ消と
いはん序のみ

寄霞

春霞山棚引欝妹乎相見後戀毳

はるがすみやまにたなびきおぼつかなくいもをあひみてのちこひんかも

一二の句ハおぼつかなくといはん序ぞ、ほのかに妹を見てハ後恋ひんと

春霞立爾之日従至今日吾戀不止本之繁家波

はるがすみたちにし日よりけふまでわがこひやまずもとのしげゝれバ

一　云片念爾指天(カタモヒニシテ)

本ハ本の木末の繁きを恋の茂きにたとへる。この、しげゝればのれを
思ふる也或本の訓をよしとも

左丹頬經妹乎念登霞立春日毛晩爾戀度可母

さにづらふいもをおもふとかすみたつはるびもくれにこひわたるかも

さにづらふ、枕詞。くれにハ宗ある　齊明紀の歌に于之廬母倶例尼(ウシロモクレニ)おきてゆ

うへときくれみに因ぞくれのきれぬまをしといへり

霊寸春吾山之於尓立霞雖立雖座君之随意

たまきはるわがやまのへにたつかすみたつともうともきみがまに〳〵

たまきはる枕詞、吾山は集中十二卷にいのちにかゝれる事多かり梅のよそにみえず

をさしとみえ、吾住の岸にある山をいふなるべしといへり、宣長は吾は妻の誤

なるべしといへり、此枕詞よりつゞけるを考ふべし、雖座をうともとよめるは宗

神紀急居此云莵岐于とよまれたれば、よみたしといへるもこれよりいへり

とりつん

見渡者春日之野邊尓立霞見巻之欲君之容儀香

みわたせばかすがののべにたつかすみみまくのほしききみがすがたか

此歌の霞の如くみまくのほしむ

急乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何将晩

こひつゝもけふはくらしつかすみたつあすのはるひをいかでくらさん

まちを恋しまつる心

寄雨

吾背子尓恋而為便莫春雨之零別不知出而来可聞

わがせこにこひてすべなみはるさめのふるわきしらずいでゝこしかも

すべなみはあまりにせんかたなくして、ふるわきしらずはふりしきるをいふ、わぎも

こを恋てまへにもとめておのれをこふる也、背は妹の字の誤なるべし、わぎも

こふるといふべし、後人の考によるべし

今更君者伊不往春雨之情乎人之不知有名國

いまさらにきみはいゆかじはるさめのこゝろをひとのしらざらなくに

此歌女のよみて人をはしきを経るまで、宣長云君は吾の誤也、さらばこゝろは女を

人のかよひ来しを、これは五年まで思ひ渡りてよめるなるべし、ひとの語はまたこれを

いでハまつれどもこゝろよくハあるべきにもあらねバこれよりゆるべし。しかし又
ゆるしてん、人のいふ言ハかならず人間のちからの及ぶべきにもあらねバのこゝえ、しらべがたく
ふかくしらざるなどいひて、いかにゆるしのいハ受頃

春雨爾衣甚将通哉七日四零者七夜不来哉

はるさめにころもハいたくとほらめやなぬかしふらバなゝよこじとや

たゞいハことの何の事ありておもふの答として所謂くたちぬるひとしきにすることひとつを
いま七八段のこゝろをいふ此頃集十一あつまのゝ沖つ白浪としもしらぬをみなのしめやかに
といふぢにするこゝろなりと見よかし

梅花令散春雨多零客爾也君之廬入西留良武

うめのはなちらすはるさめさハにふるたびにやきみがいほりせるらん

男の旅にハしとちゞまりたる君もあるらん者多くをもなつの夜もおもふべくもあるへし、按ニ
多ハ痛のやまひよりも侘かたくいひてある也

寄草

國栖等之春菜将採司馬乃野之數君麻思比日

くずらが（どもが）わかなつまんとしめのゝのしばしばきみをおもふこのごろ

初句国栖の又くずどもがとよむべし、吉野の奥に住む里人なり神武紀、
赤尾有て磐石を披て出る者あり、天皇問ひて汝ハ何人ぞ對へてまうさく
く臣ハ是磐排別の子、此別吉野國樔部が始祖也とあり、應神紀にも
國樔人来朝して歌へる事見えたり、司馬野ハ所在しばのとあれば馬ハて
ばのうち身よりいふ事にて、しめの野とよめバしめの野とせぬべし、しバしく
とでよめれバしばのゝしいふに事ありけれど、是と信、赤く姿ハかへま
身に係られバしめの野のしばしくといふべし、又しばしくも集中しきりとよめる
とや、しきの野ハくずの里にある所なり

春草之繁吾戀大海方往浪之千重積

はるくさの志げきわがこひおほうみのへによるなみのちへにつもりぬ

まへハ志げきハちんなるさて海のかくしりつてを思ひ、往ハ依の字の誤にてゆく

海よそへハ千重のえかゝるなれ

不明公乎相見而菅根乃長春日乎孤悲渡鴨

おほつかなくきみをあひみてすがのねのながきはるひをこひわたるかも

菅根の枕詞、悲今本戀に依る一本に依て改つ

寄松

梅花咲而落去者吾妹乎将来香不来香跡吾待乃木曽

うめのはなさきてちりなばわぎもこをこんかこじかとわがまつのきぞ

梅ちるとかこよせて、ちりなバ妹がまつらん、あるまじきか、おぼつかな

ちゝてわが待んよりつと松といひかけたり

寄雲

白檀弓今春山爾去雲之逝哉将別戀敷物乎

しらまゆみいまはるやまにゆくくものゆきやわかれんこひしきものを

しらまゆみハ今をいふ春をつくる枕詞、ゆくくもとハゆきといはん序まで、別は

はるくあるなる別の意也

贈縵

丈夫之伏居嘆而造有四垂柳之縵為吾妹

ますらをのふしゐなげきてつくりたるしだりやなぎのかづらせわぎも

ますらをとハ自らいふ、ふしゐなげきてハ物のうれひ造るとるハなげきつゝと

待りつゝ、みハ伏を起し、居るを立して吾妹を思ひちぢくりたるよし

せよとせしのかりよハ古言也

悲別

朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎戀八九良三

備上佐ヲ脱

あさよそのきみがきそつくことをよくみぞてなのきはるびとことひやくるさん
曲ハ委曲の俵とよくうそり、或るおゆるなあをよくも見ぎりしくゆるえ

問答　たの歌ハ問答よおかつぎるよ更まさてバ此歌叶ハぞ、次での歌ぎるこの

春山之馬醉花之不悪公爾波思恵也所因友好

ちるやまのあしびのちるのふくからぬきみにハよるやよせぬとしよし

あしびハきよう咲ふるれバたとよ、きるやハ歌是の意へ、よせあるしよりハたとひ
人の言伝せりひさわぐしようとも、女のきん

石上振乃神杉神佐備而吾八更更戀爾相爾家留

いそのかみふるのかみすぎかんさびてわれやさらさらこひにあひにける

いそのかみ、そハ枕詞あらぞ、大和国山邊郡の石上の神宮へ、古事記ニ天神
高倉下（タカクラジ）ガ夢のうちよ剱を降し賜ふ條よ建御雷神の曰、有平其国（ソノクニムケ）之横
刀可降（アリコノタチヲクダスベシト）是刀　此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都魂、此刀者坐石上神宮也　紀よハ韴靈とあり、石上の神

宮よ此剱の坐ニの故よ、そこを布都とりしと、諺の意よまして布留といふ、神名
帳よハ石上坐布留御魂とあり、神さびハ、こゝハ古身の老さるをいひて、かく老て更
小恋をしり、又卷十一石の上振の神杉神成恋をも我ハ更よあふるのみ似るものへ、
卷十二も四首とりたり

右一首不有春歌而猶以和故載於茲次

狹野方波實爾雖不成花耳開而所見社戀之名草爾　此花名花ぞしは人の本全

さぬのかハみよならずとしさきのみもさきそみえこそこひのなぐされ

此下は沙額田乃野邊のあきはぎとよめれハ、くりし樫の名なへこもあの
梅桃まで、ま卷十三てまさぬのぞとよあるハ近江之国あの地を
のこいひし、家よ来りよハよるる椒の村あふぞるうも二笠の山ハ咲よ
けるうも又椒の木の川のうまれバきこえるよそるうもなどいへるごのやしハハ
たとひ家よなうむじして、うつべ斗えとも、おほつよましをとらんぞやといふへ

狭野方波實爾成西乎今更春雨零而花将咲八方
さぬのかたハみになりにしを、いまさらにはるさめふりてはなさかめやも
女のことにちぎりしことハりなきをたとへて、今や事はなりぬるを、又はまたなる
に花さくべしやといふ、事の成ぬるうへハ、らうへのかちなしとやといふなり
梓弓引津野邊有莫告藻之花咲及二不會君毳
あづさゆみひきつのべなるなのりそのはなさくまでにあはぬきみかも
第七旋頭歌に梓弓引津の辺なるなのりその花、つむまでにあはざらめやも、なのりの
その花、いづれのとしなりけん、第十五遣新羅に引津亭作歌とありて、筑前也、なの
りその花のさけるとみえしは花の咲てえしくちれるをいへる也
川上之伊都藻之花之何時何時来座吾背子時自異目八方
かはのへのいつものはなのいつもいつもきませわがせこときじけめやも

第四巻に出たり、いつもの花詳ならず
春雨之不止零零吾戀人之目尚矣不令相見
はるさめのやまずふりつゝわがこふるひとのめすらをあひみせざらん
零作とありしを零々と見誤りて、かく零零しハあらしならんと宣長云り、
雨に降られて来ぬ人をよめるのミぞ、又さまではよめるなく
吾妹子爾戀作居者春雨之彼毛知如不止零乍
わぎもこにこひつゝをればはるさめのかれもしれるごとやまずふりつゝ
彼ハ春雨をさしていふ、妹に逢ずして涙を雨も知るやうにふるといふなり
相不念妹哉本名菅根之長春日乎念晩牟
あひおもはぬいもをやもとなすがのねのながきはるびをおもひくらさん
此下三首ハ同意にて、又あとの一首ハ此をとりかへたるのみにて此
三の歌もすべくおぼゆ

春去者。先鳴鳥乃。鶯之。事先立之。君乎之将待

ちるされバまづなくとりのうぐひすのことさきだちしきみをしまたん

まつゝの中にをるハこともなく来鳴けバことに先立といえん為とせり、

んハ…出神しきうとおもひつゝ、岩や言出しハたのこゝろするか小

山田のなはしろ水の中におりて、神代紀如何婦人反先言乎（コトデ）（コトサキダチシ）

相不念。将有兒故。玉緒。長春月乎。念晩久

あひおもはずてあるらんこゆゑたまのをのながきはるひをおもひくらさく

ちゝゑくるごとし、こゆゑハ子なるんのゆゑ、むのその詞、くらさくハくらす

さくを延ことば

夏雑歌

詠鳥

丈夫丹。出立向。故郷之。神名備山爾、明来者、

ますらをにいでたちむかふふるさとのかみなびやまにあけくれバ。

柘之左枝爾。暮去者。小松之若末爾。里人之。聞戀麻田。

つみのさえだにゆふされバこまつがうれにさと人のきゝこふるまで。

山彦乃。答響萬田。霍公鳥。都麻戀為良思。左夜中爾鳴

やまびこのこたへするまでほとゝぎすつまごひすらしさよなかのなく

みおつく

首一は丈夫のさつ矢を挿立向、其廿あるしものいはさく枝もちひ立

ミ、これらハ的に向え、同じ出立あづまとのくハ出向、いつかえせずそ　又ふたつ

ふるまひハうつかえまゝて大君の其の御楯と出立程ハなどつねと思ふな

この丈夫丹ことしけて、ま夫どもたち向ふ勢をおもひそはらくえつらん

と首ハいずれき、或人ハ丈夫丹ハ走出丹の誤なるんといへりハ、のさる

ゆゑ丈夫丹ハ誤字にて久夫ハ考べし、さて出る白ハ白玉を出して
白つるし神なるびしきれバいふ也、あふぐハ菜のはなを見て、つみハ妻の数ぞて
咲まむ時ハ、ほとゝぎすをとも鳴くを見てなん

反歌

客尒為而妻戀為良思霍公鳥神名備山尒左夜深而鳴

たびにして つまごひすらし ほとゝぎす かみなびやまに さよふけてなく

古今集にも、そのかみなるにすむ旅ねする人のな
ましをもいてなきつるほとゝぎすかな

右古歌集中出

霍公鳥汝始音者於吾欲得五月之珠尒交而将貫

ほとゝぎす ながはつこゑは われにもが さつきのたまに まじへてぬかん

ほとゝぎすのはつこゑハ、われにもがな、さつきの玉にまじへてぬかんとなん

草ハ葛ノ誤

朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時来将鳴

あさがすみ たなびくのべに あしびきの やまほとゝぎす いつかきなかん

たなびくへあるあしびきの山ほとゝぎすなくをきくめでたしとなり

且霞八重山越而喚孤鳥吟八汝来屋戸母不有九二

あさがすみ やへやまこえて よぶこどり なきやながくる やどもあらなくに

よぶこどりハやへやまこえて、よぶこどりハ八重山と地名なるをあしらひて、よぶこゑる
山をやどりもなくしてまして、やとりなきを歎むさまなり、孤ハ
子とふことのこゝろなり、此の名ハものゝ名によりてといふ人のの

霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃開落岳尒田草引嬬嫣

ほとゝぎす なくこゑきくや うのはなの さきちるをかに くずひくをとめ

源康定の説、草ハ葛の誤と見えて、葛をくずと訓て、田葛なるの
さてくずひく女をよめるなるべしとなん

月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得

つくよよみなくほとゝぎすみまくほりわがくさとれるみん人もがも

これハほとゝぎすをきかんとて庭なる草をとりてきこゆれど猶

ならずて、室ちかく、五つハ今の俗にいふくさとれるは、草とるハんて其の

木の枝をとりて居るなるべし、見するハ、ほとゝぎすの月を見るにほのゆて、

今木の枝に居るを、まてみん人もがなと也、ま十九ほとゝぎすをきゝてとく

よめるは其のとしん苑揺をやどりなるを、よめるも、ほとゝぎすのきてとく

まるべき枝をうゑんとのりしなるべし、この十九の歌にも誤字あるべし猶そこ

にいへり

藤浪之散巻惜霍公鳥今城岳叫鳴而越奈利

ふぢなみのちらまくをしみほとゝぎすいまきのをかをなきてこゆなり

今城ハ大和高市郡、ほとゝぎすを来よとつゞけたり

且霧八重山越而霍公鳥宇能花邊柄鳴越来

あさぎりのやへやまこえてほとゝぎすうのはなべからなきてこえきぬ

朝ぎりのしげみの朝ぎりのふかくやへとつゞくる枕詞也、宇ハ霧ハ霞の字の

の誤なるべし、うの花べからは卯花の咲る方よりといふ也

木高者曽木不殖霍公鳥来鳴令響而戀令益

こだかくはかつてきうゑじほとゝぎすきなきとよめてこひまさらしむ

こだかくてハ、とよませてを絶ゆべく

難相君爾逢有夜霍公鳥他時従者今社鳴目

あひがたききみにあへるよほとゝぎすあだしときゆハいまこそなかめ

ことにあへるよハ、いくたびあへる夜にまさるべけんのいはく

木晩之暮闇有爾 一云有者 霍公鳥何處乎家登鳴渡良哉

このくれのゆふやみなるにほとゝぎすいづくをいへとなきわたるらん

このくれハ木のしたやみとなり。哉ハ武の誤之一本の有者もかくのごとく同じ
こゝなる古意の例之

霍公鳥今朝之旦明爾鳴都流波君將聞可朝宿疑將寐
ほとゝぎすけさのあさけになきつるハきみきゝけんかあさいやぬらん
朝けハ朝あけ也、君ハ家持けんかく。きくハ聞にしてあさいのぎらしのとゞめ之
疑ハ言やらん欤の意な用ひたり

霍公鳥花橘之枝爾居而鳴響者花波散乍
ほとゝぎすはなたちばなのえだにゐてなきとよもせバはなハちりつゝ

慨哉四去霍公鳥今社者音之千蟹来喧響目
うれたきやしこほとゝぎすいまこそハこゑのかるゝまでなきとよまめ
神武紀慨哉此云于黎多棄加夜、一二の句ハ化鳥のくるを罵りていへり、
しこハ醜ものしことまうすなる同じく、醜く、書紀本文に字礼多伎也志

許霍公鳥のうぐひすのしきこゆるおもひどりくとよみなしてこの句よみハ云
なまよりくありのほとゝぎすいとふべくもあらぬをとりなして、かゝるうたハ許がかへ
そはの也之

今夜乃於保束無荷霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左
このよらのおぼつかなきにほとゝぎすなくなるこゑのおとのはるけさ
おぼつかなくなる詞也、おぼつかなくといふと同じ

五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鴨
さつきやまうのはなづくよほとゝぎすきけどもあかずまたなかぬかも
さつき山ハ名所にあらず、五月のころのやまをいふ、夜ハあまのさら
ちるハ、月夜のかげのあかきをいふ、ちるみハ、あけのしと云詞なり、ハ誤る
る詞もなく鳴くをきくをゆかしきふるハ集中多かるし

霍公鳥来居裳鳴香吾屋前乃花橘乃地二落六見牟

ほとゝぎすきゐてもなくかわがやどのはなたちばなのつちにおちんみん

なくかハ鳴かもの意、宣長云、六見年ハ左右手の誤にて、おつるまでと訓べし

とハ、大きなるしハよそまでといふことに叶りとぞ

霍公鳥厭時無菖蒲蘰将為日従此鳴度禮

ほとゝぎすいとふときなしあやめぐさかづらにせんひこゆなきわたれ

いつとなくいとハぬなるべし、かづらくハ五月五日のはなしてはやることなり

とし、菖蒲のかづらハ続紀天平十九年五月、太上天皇詔なせるハ五日節菖

蒲かづら縵とせしが、比来已に止るをやむ、今より後菖蒲縵あらずして宮中

に入るまじきと有、巻十八に田邊史福麻呂が哥にもとく有載たり

山跡庭啼而香将来霍公鳥汝鳴毎無人所念

やまとにハなきてかくらんほとゝぎすながなくごとになきひとおもほゆ

人をこひしのびてよめるなるべし、巻八旅人卿の妻大伴郎女みまかりし

時石上堅魚の哥に、ほとゝぎすきなきとよもす卯の花のともにやこしととはましものを

ハ、かのをさとりてあるし、なき人をまちやとりありく、ちるよし

ほとゝぎすさそはれていひなれたるハ、せしとらんゆ

宇能花乃散巻惜霍公鳥野出山入来鳴令動

うのはなのちらまくをしみほとゝぎすのにいでやまにいりきなきとよもす

ほとゝぎすもこの花をちらすまじとあはれなきさわがしむなるべし

橘之林乎殖霍公鳥常尓冬及住度金

たちばなのはやしをうゑんほとゝぎすつねにふゆまですみわたるがね

冬のほとゝぎすの声をとゞめるはまる、わがやどの橘に住せんとなり

とゞむるがねハ、そのをなしいふ詞

雨霽之雲尓副而霍公鳥指春日而従此鳴度

あめはれのくもにたぐひてほとゝぎすかすがをさしてこゆなきわたる

西ゆくハ、立山の方へ帰るをいふなるべし、この場所にてよみし、
霄を今本﨑とあれど、字のかたち見えねば、一本に依て改

物念登不宿且開爾霍公鳥鳴而左度為便無左右二

ものおもふといねぬあさけにほとゝぎすなきてさわたるすべなきまでに

ものおもひにいねざりし夜の明まへさわたるのさへ哀深く鳴渡るを

吾衣於君令服與登霍公鳥吾乎領袖爾来居管

わがころもきみにきせよとほとゝぎすわれをうしはくそでにきゐつゝ

吾衣をば君にきせよとて、我そでにきてなくとなり、ほとゝぎすのなくを

る衣をぬぎとりてやがて君におくるなり、とぞ

なぞらへて、領ハ手八千の語のごとく、領ハ衣一領などのへバ、さと訓べけれバ

さのわたきるのこゝになるべし、此句かけりしるしの神にまかせて鳴

ものぞよかりしなり、四の句語をよむべし、

本人霍公鳥乎八希将見今哉汝来戀乍居者

もとつひとほとゝぎすをやめづらしくいまやながくこひつゝをれバ

ほとゝぎすをさしてもとつ人といへり、今やなれがくるとこひつゝ

遠つ人ハ雁といへるにひとし、をやハよやのごとし、遠つ人雁がきつらんとよめる類也

如是許雨之零爾霍公鳥宇之花山爾猶香将鳴

かくばかりあめのふらくにほとゝぎすうのはなやまになほかなくらん

ふらくハふるを延ていふ、卯の花山ハ卯の花のさかりの山をいふなり、

いつかく雨のふるをもいとはずほとゝぎすの鳴やらんといふ

詠蟬

黙然毛将有時母鳴奈武日晩乃物念時爾鳴管本名

もだもあらんときもなかなんひぐらしのものおもふときになきつゝもとな

和名抄云、爾雅云、茅蜩、一名蠽（比久良之）小青蟬也とあり、ひぐらしハたゞ

ともあんとよむべし

詠榛

思子之衣将摺爾爾保比與島之榛原秋不立友

おもふこがころもすらむにゝほひこそしまのはぎはらあきたゝずとも

乞を与に誤れるへしおもふ人のきぬにすらんにほへといふ也島ハ所の名

榛ハ萩也秋たゝずとも秋の来ぬ此まへの時に萩原よ色にほへとよめるなり

詠花

風散花橘叫袖受而為君御跡思鶴鴨

かぜにちるはなたちばなをそでにうけてきみがみあとゝおもひつるかも

妻卯ニ橘のちるを袖にうくるハ君が御衣に匂ふときミハなくて

みかげハ君御為跡とてつゝんでおもひまゐらすハ君の上へ為の字

加入しなるべし

香細寸花橘乎玉貫将送妹者三禮而毛有香

かぐはしきはなたちばなをたまにぬきおくらんいもはみつれてもあるか

くはしきはなたちばなのよきをみつれて居る時にみたまにぬきていもにおくらんとおもふ

つれと訓てをりハ所送といふて将送といふてハ病てつれ居る時をさしてよめるなるべし

よろしき欲といふなるべし

霍公鳥来鳴響橘之花散庭乎将見人八孰

ほとゝぎすきなきとよもすたちばなのはなちるにはをみんひとやたれ

橘のちる庭をばわれこそハ見るべきといふなれといへる

吾屋前之花橘者落爾家里悔時爾相在君鴨

わがやどのはなたちばなはちりにけりくやしきときにあへるきみかも

橘を賞るしればちるを待るしのひとなくていとまゝ時にあへるよと

つるよしも

折ハ所ノ誤

見渡者向野邊乃石竹之落巻惜毛雨莫零行年

みわたせばむかひのゝべのなでしこのちらまくをしもあめなふりそね

うちむかふ野のなでしこ。行ハ所の誤也

雨間開而國見毛将為乎故郷之花橘者散家牟可聞

あまあけてくにみもせんをふるさとのはなたちばなはちりにけむかも

あまあけてハ雨の晴間に國見せんと思ふに橘の花のちりなんかと思ひやりて國見をせんは橘

もさかり也といふ也

與ハ乎ノ誤

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母

のべみればなでしこのはなさきにけりわがまつあきはちかづくらしも

吾妹子尓相市乃花波落不過今咲有如有與奴香聞

わぎもこにあふちのはなはちりすぎずいまさけるごとありこせぬかも

あふちを句の隠れ、棟を妹にあふにいひかけていつもちらずしてさかりなるやうに

あれかしとねがふ

春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而将挿頭

かすがのゝふぢはちりにてなにをかもみかりのひとのをりてかざゝん

おりてハ、いかにいふての意

不時玉乎曽連有宇能花乃五月乎待者可久有

ときならぬたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべし

上句一二三と打まかしてよむべし。時ならで卯の花をぬけるといへるは、

卯の花を五月にかくべき玉とはさつきまちがたさに、時ならぬ橘の

花のやうに稀の實の稀なるにつきてぬるをいふ

問答

宇能花乃咲落岳従霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八

うのはなのさきちるをかゆほとゝぎすなきてさわたるきみはきゝつや

聞津八跡君之問世流霍公鳥小竹野爾所沾而従此鳴綿類

さわたるのさハ發語也

きゝつやときみがとはせるほとゝぎすしのゝにぬれてこゆなきわたる

此集によく篠に之努てぬれくとよめり、五月雨にぬれて鳴わたるさまなり、沾を活に誤れり、文字の寫よりまかふ歟

譬喩歌

橘花落里爾通名者山霍公鳥将令響鴨

たちばなのちるさとにかよひなばやまほとゝぎすとよもさむかも

本ハ嫉妬の意なり、まハ人にいひさわがれんといふなり

夏相聞

寄鳥

春之在者酢軽成野之霍公鳥保等穂跡妹爾不相来爾家里

はるさればすがるなすのゝほとゝぎすほとほといもにあはずきにけり

和名抄東雅注云、蠮螉佐曽里、似蜂而細腰者也、兼名苑云、一名蜾蠃とあり、雄略紀に蜾蠃といへる人名あるを、これをもすがるとも訓せり、俗にジガバチといふ

ものなり、すがる草を借てまるなるもくもりかくすべし、ほとゝぎすも鳴の音を借て、まことにかれバかのものもくものくとをきこゆる

をもなるなりと、いふるなるべし、さくほとゝぎすとよめるも

あり、よくほとゝしくいかん序なく、猶悲にまなべきを逢ぎして、手月

なうらしすよそりてあるを翁いかれき、されど二の句穏かならぬ、誤字

あらん歟

五月山花橘爾霍公鳥隠合時爾逢有公鴨
さつきやまはなたちばなにほとゝぎすかくろふときにあへるきみかも
五月の橘にほとゝぎすのかくるゝ時節にあへる君をよろこぶ
かくろふハかくるゝと延言
霍公鳥来鳴五月之短夜毛独宿者明不得毛
ほとゝぎすきなくさつきのみじかよもひとりしぬればあかしかねつも
寄蟬
日倉足者時常雖鳴我恋手弱女我者不定哭
ひぐらしはときとなけども わがこふるたをやめわれはさだめずなく
上の我ハ[illegible]一本に物と有一本によれバこのくだり[illegible]と行べし
[illegible]君の[illegible]ひぐらしハ[illegible]となけども
[illegible]と[illegible]不定ハ[illegible]ときわかずとよまれハ

このちまでたをやめ[illegible]丈夫我ハ又世の人をれハちらずよあまりにひとしく、
女のみづからいふ也
寄草
人言者夏野乃草之繁友妹与吾携宿者
ひとごとはなつのゝくさのしげくともいもとわれとしたづさはりねば
そのごとく人言を思ひき、携りねばよからんといふをとゞめて、之[illegible]五日の[illegible]
師の説なり
逎者之恋乃繁久夏草乃苅掃友生布如
このごろのこひのしげくなつくさのかりはらへどもおひしくがごとし
[illegible]十一ハわが[illegible]わが[illegible]ハ[illegible]のかりそくれども[illegible]のごとしハ[illegible]
[illegible]同じ[illegible]おひしくハ[illegible]及[illegible]
真田葛延夏野之繁如是恋者信吾命常有目八方

類合ヲ類令ニ誤

まくばたふちなつぬのしげくかくこひばさねわがいのちつねならめやも

夏の野のしげく〳〵ふと思ひつゞくる心のまゝにいはゞ我命の定まら

ずあらんや、絶しぬべしといふ也、又麿考ふ方を面に作る

吾耳哉如是戀為良武垣津旗丹頬合妹者如何将有

われのみやかくこひすらんかきつばたにつらふいもはいかにあるらむ

類合を一本類令に誤れり、又麿考ふるに巻十一垣幡丹頬経君（カキツバタニツラヘルキミ）

叫ト有り、ゆづりてつらふとよむべしあれば、かきつばたは枕詞

寄花

片搓爾絲叫曽吾搓吾背兒之花橘乎将貫跡母日手

かたよりにいとをぞわがよるわがせこのはなたちばなをぬかんとおもひて

かたよりは片よりにたよふ、糸のうへを書へ多てちゞると、当花なれば

花をいひてあるぬる人とおもひてはる朱さんとねがふなり

鸎之往来垣根乃宇能花之厭事有哉君之不来座

うぐひすのかよふかきねのうのはなのうきことあれやきみがきまさぬ

鶯ハかれども、君ハ来ずとしといふなり、あれバにや、君の来ぬよし、卯

花ハうのはなをいひ出んためにて、君ハうきことある故にこぬかとのうの

うの花のことくにて、下全同じ意也

宇乃花之開登波無二有人爾戀也将渡獨念爾指天

うのはなのさくとはなしにあるひとにこひやわたらんかたおもひにして

上句ハつれなくてあるへきたとふるべし、卯花のさかぬのことくにおもひすてたびきくとなすまでかれる詞也、其人のむなしく、身の栖るハ出来ぬといふなり

ぬるべきへて知べし

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘乎見爾波不来鳥屋

われこそはにくくもあらめわがやどのはなたちばなをみにはこじとや

筒ヲ今箇ニ誤

我といふハあなたを、不構ともへにえまちどもやと、女のこゝろ

霍公鳥来鳴動崗部有藤浪見者君者不来登夜

ほとゝぎすきなきとよもすをかべなるふぢなみみにハきみハこじとや

これハたゞ同じくとて、わがまちし君ハ来らずとも、藤と、ふぢハみえまし

またぬともやとらなん

隠耳戀者苦瞿麦之花爾開出與朝且将見

こもりのみこふればくるしなでしこのはなにさきでよあさなさなみむ

こもりつゝこふハものうく、花にさきでよハ、能出てみえんといふなり

こハたゞ時ふくことのとりてさとれるなり

外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友

よそのみにみつゝこひなむくれなゐのすゑつむはなのいろにいでずとも

筒を箇に誤れり。まつむはなハ紅花也、まつかつみとも、これハ志のいはゆ、そて

色に出ぬかのそでハなつきとも、このはの色にいでぬとふとかなひし、まへ集中

字よりとのよあれバ、宜ちハられつむ花とよまんとなり

寄露

夏草乃露別衣不著爾我衣手乃干時毛名寸

なつくさのつゆわけごろもきせなくにわがころもでのひるときもなき

露をわくるころも、きせもせぬよのせハ老せぬ、絶せぬゆゑのせなひくしく、たき

なみだ老のおもせてゞ蓋世(ケセル)流れるなりとあり

寄日

六月之地副割而照日爾毛吾袖将乾哉於君不相四手

みなづきのつちさへさけててるひにもわがそでひめやきみにあはずして

月の名のみナハ考の別記にあり

秋雜歌

知ハ弥ノ誤火ハ哭ノ誤

七夕（ナヌカノヨヒ）

天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉

あまのがはみづさへにてるふなわたりふねこぐひとにいもとみえきや

左本水の下底の字あり、志かれバ二三四の句ハみなそこさへにてらせるふねのさをさし河べし水底までも照らせるばかりの月あかりにさす舟をいへるにや、舟人

ハやがて牽牛をさし、妹ハ織女といへるにや、こよひハ妹にあひみえたるかと云也

久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津乏諸手丹

ひさかたのあまのがはらにぬえどりのうらなげましつともしきまでに

裏一ト歎居若（ウラナケヲレバ）ハ、裏千七字良奈氣之都追（ウラナケエツツ）とあり、裏歎をうらなげきとよむべし、諸手ハ真手、或ハ

かゝるこひハたぐひなくめづらしきまでにまちえてよろこぶ[illegible]

左右とかけるも同じ意也

吾戀嬬者知遠往船乃過而應来哉事毛告火

わがこふるつまハしれるをゆくふねのすぎてくべしやこともつげなく

知一本弥に作るぞよき、つまハやよくしりたるべし、火ハ哭の誤なるべし、いぬるを

まちいで給ひて嬬ハ借りうけて、牽牛をさして、牽牛ハ舟こぎ出て、言をも

のせずかへりなんとて、ほど遠くなりゆくなるハ、たのもしげなくさびしくおもふべきことのかなし

みなるを

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

あからひくしきたへのこをしばみれバひとづまゆゑにわれこひぬべし

あからひく枕詞、しきたへの子ハ[illegible]あからひく[illegible]

[illegible]あからひく[illegible]数（シキタヘ）細布のこと、數ハ物の[illegible]、細布[illegible]

よき細布[illegible]、和（ニギ）やの[illegible]

と為[illegible]、人妻[illegible]

ふこゝハ巻一、紫のにほへる妹をにくゝあらバ人嬬故にわれこひめやもとも

あるに同じく、人ハ人の妻なるものといへる也、此歌七夕の歌ときこえず、猶よく

こゝろみるべし

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具

あまのがはやすのわたりにふねうけてあきたつまつといもにつげこそ

やすの渡ハ河の一名也、神代紀八十万神會合於天安河邊といふにかなへり

是ハ宣なるハ秋ハ我の待也、わがたちまつとくといへるをよめるにて、与具ハこそ其の仮

なるべし、告こそハ告よかしとねがふ詞也、巻十三真福在(マサキクアリコソ)与具とよめるも、

在こそ其の仮なるを、是れバ此ハ仮れる也

後蒼天往来吾等須良汝故天漢道名積而叙来

おほぞらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはぢをなづみてぞこし

彦ぼしのよめるなり、汝ハ織女をさす

八千戈神自御世乏孋人知爾来告思者

やちほこのかみのみよよりともしづまひとしりにけりつぎてしおもへば

八千戈神ハ大己貴命にて、三輪の大神也、巻六八千桙の神の御世より言

ひつぎ、ともしづまハたまさかに逢事をいふ、此ハ時ありて逢ふ故に、告ハ借れる字にて、

言ハ継也、巻三長歌語告言継将往(ノヒツギユカン)とかたりつぎともよむべければ、ここもつぎ

とよめり、孋ハ文選左大冲詩に伉儷不安宅、張銑か注に伉儷謂妻也とあり

儷孋同歟、されど一通り用ひしならんと宣長いへり

吾等戀丹穂面今夕母可天漢原石枕巻

わがこふるにのほのおもわこよひもかあまのかはらにいそまくらまく

彦星によみて、よめり、にのほの面わハ巻十九御面謂之美於毛和とも

自註に、於毛和とあり、いそハ則石也

已孋乏子等者竟津荒礒巻而寐君待難

余ハ余ノ誤

志づつまのとかきさとらハたちてみつあかそてまきてねんきみまちつのでふ

一二の句ハ織女をさして竟津あらそひつよぶされどよしなし竟ハ立見二
字の一字はるかなりて天の河原に立ぬる日ハあまりといふべきにあらずべしとこね
いまさきうたとる竟津はつるつのと訓べしさて一二の句ハおのづからよし
むこうハとよみ四の句あかてまきてぬと訓べしとたてり於考べし

天地等別之時從自孋然叙手而在金待吾者

あめつちとわかれしときゆおのづつまとしてあきまつとれハ

四の句誤字あらんか解がたし契沖ハ志のぞて一よみあるハ先にいへるがよし
織女ハおのがつまと定らるゝかそをくよみえいつも於考べし

彦星嘆須孋事谷毛告余叙来鶴見者苦彌

ひこぼしのなげきてつまことにもつげよぞきつるみればくるしみ

元唐本彦を孫に作る、ひこぼしの歎きをみるもくるしきれハ他人のうへはと 右

与ハ乞ノ誤

告よまりしとく余ハ余の誤也

久方天印等水無川隔而置之神世之根

ひさかたのあまつしるしとみなしがはへだてゝおきしかみよのうらめし

此末も句ハ天験と定てしときゝみなせがてゝ訓されど元唐本
みなしがはとよむべし別天漢のこと也

黒玉宵霧隠遠鞆妹傳速告與

ぬばたまのよぎりがくりてとほくともいもがつてははやくつげこせ

妹がつてとハ織女より言をつたへてよこせとこそよしとそ与ハ
乞の誤也

海戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隠

なのこちなもいものみことハあきたらにそでふるみえつくもがくるまで

あきたらハあくまでのこと也

水ヲ志ノ假字ニ用タルハ㴚音ヲ直音ニ轉タル也

夕星毛往来天道及何時鹿仰而将待月人壮

ゆふづゝもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたんつきひとをとこ

巻二夕づゝのかゆきかくゆきとよめり和名抄長庚由不豆々月人をとこハ

此下にも見えて義をとりて此の下子を服せり 下[illegible]

天漢已向立而戀等爾事谷将告孋言及者

あまのがはこむかひたちてこふらくにことだにつげんつまごといふまでハ

こむかひのこハ此方の略也巻十八に安の川許牟可比太知弖とよめ

等ハ来をかよひて[illegible]これハ牽牛のいまだ織女をわたらずして

恋ふるさまをよみて[illegible]つまどいふまでにハまことの妻といふ

までハのことハ言之屋にある[illegible]字なり[illegible]

水良玉五百都集乎解毛不見吾者于可太奴相日待爾

しらたまのいほつどひをときもみずわれハほしかねあはんひまつに

巻十八思良多麻能伊保都々度比乎手にむすびよこせむあまもがも[illegible]

[illegible]これば[illegible]つけるちまだし[illegible]つどひハ[illegible]

きこと[illegible]ハ[illegible]がたきへがたハ不勝といふ詞なり又[illegible]

[illegible]干といへるもいのぢ干ハ左の[illegible]わかつるこの

天漢水陰草金風靡見者時来之

あまのがはみづかげぐさのあきかぜになびくをみればときはきぬらし

巻十二山河水陰生山草といふ此[illegible]を一本に隠とも[illegible]陰

の字の[illegible]みづかげ[illegible]水分とみくまりとも[illegible]

[illegible]みなまた[illegible]をとりて[illegible]

[illegible]林風[illegible]なびく[illegible]大[illegible]十二山[illegible]あるハ

[illegible]ば[illegible]されど此

[illegible]陰草[illegible]ハ山の[illegible]ば水に生る草を水陰草と

ほどしと妻がいつまふよるべし朱の下良の字を服せるかいさだ杜風
み天の川べのまみれ亂くをまとく二星ね逢時まつるらんといひてあり
吾等待之白芽子開奴今谷毛爾寶比爾徃奈越方人邇
わがまちしあきはぎさきぬいまだにもにほひにゆかなをちかたびとに
字ちら状をはぎさきぬ八今まつべき時なるをいふとぞにしへ八月は冬と
云てとろうてせあそ今まつるとぞ此下の字の今だすも之同じといへり
みかひこのゆかれとて字平ニま艶の字をみかひて訓しんきくべし
こていふぞなそるあきふゆのんといふこゝまるらん越方人八織女をまをべ
白八西方狀の色なれバあきをいへり
吾世子爾裏戀居者天河夜船榜動梶音所聞
わがせこにうらこひをればあまのがはよぶねこぐなるかぢのおときこゆ
わがせこ八彦星をさせり心こひ八心の中ふ戀る之

真氣長戀心自白風妹音所聽紐解徃名
まけながくこふるこゝろゆあきかぜにいもがおときこゆひもときゆかな
年もくまものことをまへするに彦星のこゝろへるの八秋風の便よ妹が
音信せしにゆるかゆのんと彦星ハ徒ハ待の涙まてまうくるなどといへり
戀敷者氣長物乎今谷乏之牟可哉可相夜谷
こひしくはけながきものをいまだにもともしむべしやあふべきよだに
此年そぶよこふる日ハけながきものをとなぶなどそしむべし
このをとこそ歳こかいづれのなくなるらん云しくハ年中こひしくのとも
よみくしくハ相見の只云ハとなびべし、とそしむべしや八まんとなるらし
とハ秋なるとしもいとなくがちつくさじらんやのことく
天漢去歳渡伐遷閉者河瀬於蹈夜深去来
あまのがはこぞのわたりばうつろへばかはせをふむによぞふけにける

さうらむのむハ場の事をいへ於ハふむよのふのこゝろ目ありて津ハ後なり
渡の事なれバ河渡をふみ試るほどを云の又なる之

自古擧而之服不顧天河津爾年序經去来

いにしへゆあげてしはたもかへりみずあまのかはつにとしぞへにける

服とかきれどこハたちぬへる衣をいふなりて機のうへ彦星を待
ことるへの切ちゃるかぎりあらぬものをもいそふへむかへ立るんむとを

天漢夜船滂而雖明将相等念夜袖易受将有

あまのがはよふねをこぎてあけぬともあはんとおもふよそでかへずあらん

あひたとおもふ夜のあるまでて夜自をうべき時節かぬれバこよひもあはず
あらんといふべし二の句より結句へ[illegible]

逢嬪等手枕易寐夜雞音莫動明者雖明

とほつまとたまくらかへてねたるよハとりがねなきそあけバあくとも

尓ヲ尒二誤

も枕をてハよの袖をかへすと同じくかりて嬪ハ嬬の誤なり

相見久猒雖不足稲目明去来理舟出為牟孃

あひみらくあきたらねどもいなのめのあけゆきにけりふなでせんいも

いなのめの枕詞、彦星の[illegible]より[illegible]れり

左尼始而何太毛不在者白栲帯可乞哉戀毛不過者

さねそめていくだもあらねバしろたへのおびこふべしやこひもつきねバ

さハ發語くいくだハいくばくの略くてたくとうたとりつ自じ、あらねだ、
つきねバなりあら[illegible]つきぬまの[illegible]、おもふんとて[illegible]
移すてつきある[illegible]、常[illegible]べしやハ織女の[illegible]
もちぎねバとあり

萬世携手居而相見鞆念可過戀爾有莫國

よろづよにたづさハりゐてあひみともおもひすぐべきこひならなくに

あひみることハあらくなりしと、爾之本会之紀之麻加ふよあるへくや

萬世可照月毛雲隠苦物叙将相登雖念

よろづよにてるべきつきもくもがくりくるしきものぞあはむとおもへど

百代に照べき月もくもがくれ一夜の間も隠れて苦しき事なるを二年まで百代をあかりん

ことハちへど一夜を待惜しむが苦しといふこと也

白雲五百遍隠雖遠夜不去将見妹當者

しらくものいほへがくりてとほけどもよひさらずみむいものあたりは

天河をへだてゝ遠ざかれども、夜ごとに妹が家のあたりハ見やらんとなり

為我登織女之其屋戸爾織白布織弖兼鴨

わがためとたなばたつめのそのやどにおれるしろたへおりてけむかも

そのやどハ織女のやどなり、吾為ニおりてよみけんかとなり

君不相久時織服白栲衣垢附麻弖爾

きみにあはでひさしきときゆおれるたへのしろたへごろもあかづくまでに

織女ちなみてよみたる服をよみしたるなり、衣白と結白より出て見へし

天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜

あまのがはかぢのおときこゆひこぼしとたなばたつめとこよひあふらしも

和名抄尓雅云、子之子為孫、無万古、一名比古とあれバ、孫よめり

秋去者河霧天川河向居而戀夜多

あきされバかはぎりわたるあまのがはかはにむきゐてこふるよぞおほき

此様集に川ぎりわたるとあり、此下まて川ぎり立渡るまであれバ、霧の

下渡の字を脱せるか、又愚本向居而を而向居と在り、かはにむかひゐると訓

歌し

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨

よしゑやしたゞならずともぬえどりのうらなけをるとつげんこもがも

直にはいはずとも人傳にも妹に言傳せまほしきことなくてはるかなるかも
といへることは妹をさして

一年爾七夕耳相人之戀毛不過者夜深往久毛

ひとゝせになぬかのよのみあふひとのこひもつきねバよのふけゆくも（よふけゆくも）

つきねばとは俤のつきみるのそこえ也不遏を過と書る

一云不盡者佐宵曾明爾来（ツキネバ サヨゾ アケニケル）

天漢安川原定而神競者磨待無

あまのがはやすのかはらのさだまりてかんつどひハときまつなくに

後釈の天安河原に集ひ玉ふは時に限てなく二年のつどひハ一とせに只
一度のみと定れるを恨む也神競は詞なるべしとあれど古人の詞とて
も競ハ競集同じ言なり然れバつどひと訓べし磨ハ時の借字の也借字へ
清濁にかゝはらぬ例なくと萬のそれにこ宮にちかきにあり或人説にハ而ハ西の字の誤

競ハ鏡の誤にて、やそのかみにきこゆなかみのかゞみハどくまつなくにと
訓べし、これハ月を神代の鏡にたとへし、此鏡ハ磨（トグ）をまつことなくして、いつも
くもりなきといふ也七夕の夜に月をよめる例なきにいへり、猶考べし

此歌一首庚辰年作之　庚辰ハ天武天皇白鳳九年也

右柿本朝臣人麻呂歌集出　右三十八首ともに人麻呂歌集の中
ざまにこれ皆同歌集なるべし

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見

たなばたのいほはたたてゝおるぬののあきさりごろもたれのとりみむ

五百機ハ機の数多きをいふ秋去の言ハ来られバ夕されバのされの語の如く
秋にあはれる衣にて、秋の衣をとりてされらとよまんハ誰早きなるべし誰のとも
てすみんとらすゝ字ちハ秋去ハ和布の字の誤にて、ふぎたへごゝとな
らんといへり

年有而、今香将巻、烏玉之、夜霧隠、遠妻手乎

としはありて、いまかまくらん、ぬばたまの、よぎりがくれる、とほづまのてを

としをへてとハ一とせをへらせてん

吾待之、秋者来沼、妹與吾、何事在曽、紐不解在牟

わがまちし、あきはきたりぬ、いもとわと、なにごとあれぞ、ひもとかざらん

あれぞハあればぞのこゝろ、何ゆゑありてか紐をとかざるべきといふこゝろ

年之戀、今夜盡而、明日從者、如常哉、吾戀居牟

としのこひ、こよひつくして、あすよりは、つねのごとくや、わがこひをらん

一とせまちしおもひを此一夜にはらしてといふ

不合者、氣長物乎、天漢、隔又哉、吾戀将居

あはずば、けながきものを、あまのがは、へだてゝまたや、わがこひをらん

あはずハけながきとハあはぬまを延といふ

戀家口、氣長物乎、可合有、夕谷君之、不来益有良武

こひしけく、けながきものを、あふべかる、よひだにきみが、きまさゞるらん

古の字ハ孫女の傍ほどのこと

牽牛與、織女今夜相、天漢門爾、波立勿謹

ひこぼしと、たなばたつめと、こよひあふ、あまのかはとに、なみたつなゆめ

織女を後世おりひめとよめど、たなばたつめとよむべきなり、此歌を證とすべきに

てしるべし

秋風吹、漂蕩、白雲者、織女之、天津領巾毳

あきかぜの、ふきたゞよはす、しらくもは、たなばたつめの、あまつひれかも

雲を領巾に見なしたるなり、雲之の色を領巾(ひれ)遥とらゑ文字を改む

すいひつ

數裳、相不見君矣、天漢、舟出速為、夜不深間

しばしも、あひみぬきみを、あまのがは、ふなではやせよ、よのふけぬまに

しばしもハ度々もと也

秋風之清夕天漢舟榜度月人壯子

あきかぜのさやけきゆふべあまのがはふねこぎわたるつきひとをとこ

月人をとこハよるも出る彦星をいふ

天漢霧立度牽牛之檝音所聞夜深往

あまのがはきりたちわたりひこぼしのかぢのおときこゆよのふけゆけば

君舟今榜來良之天漢霧立度此川瀬

きみがふねいまこぎくらしあまのがはきりたちわたるこのかはのせに

此川の瀬ハ己の川瀬をいふ

秋風爾河浪起暫八十舟津三舟停

あきかぜにかはなみたちぬしましくはやそのふなつにみふねとどめよ

八十の舟津ハ津の多きをいふ、三舟の三ハ借字にて、御舟也

天漢川聲清之牽牛之秋榜船之浪踍香

あまのがはかはおときよしひこぼしのあきこぐふねのなみのさわぎか

踍ハ躁の俗字、字書に見ゆ、秋ハ速の借字にて早榜船とかいのちるをいふべし

いづれも唐本川を河に作る、下皆しかり

天漢川門立吾戀之君來奈里紐解待

あまのがはかはとにたちてわがこひしきみきたるなりひもときまたん

一云　天川河向立

あまのがはかはとにをりてとしつきをこひきしきみにこよひあへるかも

天漢川門座而年月戀來君今夜會可母

をりてハ待居て也

明日從者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐

あまのがハわがたまくらをとうちかけてひさしくいねずてひとりかもねん

或ハほうえりにまかく

天原往射跡白檀挽而隠在月人壮子

あまのはらゆきてやいるとしらまゆみひきてかくせるつきひとをとこ

月人をとこハよくよくあるハ皆彦星のことゝきこゆるを、その月の

るとせんもいのでこそされバ三やの句ハ夕月の隠るゝをいへるなるべし、往射

跡三字解べからず、誤字なるべし

此夕零来雨者男星之早榜船之賀伊乃散鴨

このゆふべふりくるあめハひこぼしのはやこぐふねのかいのちるかも

七日の夕べ降る雨ハ彦星のとくはやくこぐ舟のかいのしづくのあまれ

るといへり

天漢八十瀬霧合男星之時待船今榜良之

あまのがはやそせきらひぬひこぼしのときまつふねハいまこぐらし

時まつハ秋待なるべし

風吹而河浪起引船丹度裳来夜不降間爾

かぜふきてかハなみたちぬひきふねにわたりもきませよくだちぬまに

風吹て浪たちぬれバ引き船にして渡りませとなり

引きてわたりつゝん、おそくなりなバ夜更ぬべし

天河遠度者無友公之舟出者年爾社候

あまのがハとほきわたりハなけれどもきみがふなでハとしにこそまて

天河打橋度妹之家道不止通時不待友

あまのがはうちはしわたせいもがいへぢやまずかよハんときまたずとも

うちはしハ打橋にて、室ありしハうつし橋なり

あるハ橋とやせバりといへり

月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨
つきかさねわがおもふいもにあふよるはいましなゝよをつぎこせぬかも
なゝよのよは助辞なり今七夜續けりと称へ
年丹裝吾舟榜天河風者吹友浪立勿忌
としによそふわがふねこがんあまのがはかぜはふくともなみたつなゆめ
としに一たびよそひく舟をとゝのふる
天河浪者立友吾舟者率榜出夜之不深間爾
あまのがはなみはたつともわがふねはいざこぎいでんよのふけぬまに
直今夜相有兒等爾事問母未為而左夜曾明二来
たゞこよひあひたるこらにことゝひもいまだせずしてさよぞあけにける
人のまへにひよみがたくかくしよむべし
天河白浪高吾戀公之舟出者今為下

あまのがはしらなみたかしわがこふるきみがふなではいまぞすらしも
機躡木持往而天河打橋度公之来為
はたものゝふみきもちゆきてあまのがはうちはしわたすきみがこんため
機和名抄云國語註云織設經緯以機成繒布也楊氏漢語抄云高機多加波太
云々又辨色立成云機躡万祢岐躡踏也とあれバふみ木といへハ此機躡の
天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨
あまのがはきりたちのぼるたなばたのくものころものかへるそでかも
古織義之八多手此暮衣縫而君待吾手
いにしへゆおりてしはたをこのゆふべころもにぬひてきみまつわれを
義ハ義の借くよる也、これをのちの縫ところかたし将省
足玉母手珠毛由良爾織旗手公之御衣爾縫将堪可聞
あしだまもてだまもゆらにおるはたをきみがみけしにぬひあへんかも

乃ハ久ノ誤

神代紀手玉玲瓏織紝之少女者、是誰之子女耶、仁徳紀四十年爰皇后
ここハ皇女所賞之足玉手玉、巻十一新室をふみしづの子がくだまならし
ともよめり、ゆらハ鳴る意、旗ハ借ふつく機之

擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得
つきひえらあひてしあれバわかれまくをしかるきみハあすさへもがも
義ハ義の誤、別の下乃ハ久の誤なるべし、あすさへもがもハ明日さへもあれかし
せをねがふ

天漢渡瀬深彌泛船而棹来君之檝之音所聞
あまのがはわたりせふかみふねうけてこぎくるきみがかぢのおときこゆ
棹ハ本をよんてきし刈べし

天原振放見者天漢霧立渡公者来良志
あまのはらふりさけみればあまのがはきりたちわたるきみはきぬらし

これハ七夕の夕をまちて、彦星の来るを、下つ国までおもひやりてよめるなり

天漢瀬毎幣奉情者君乎幸来座跡
あまのがはせごとにぬさをたてまつるこゝろハきみをさきくきませと

久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿
彦星の来るをまちむかふる織女の歌なるべし
ひさかたのあまのかはづにふねうけてきみまつよらはあけずもあらぬか
あけずもあらぬかハ、あけずあれかしのこと

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久
あまのがはあぬらしわたるきみがてもいまだまかねばよのふけぬらく
彦星の歩渡せしをいへり、まかねバ、例のまかぬかのごとし、官本久を之に
作るハ之をてにはに付ハぞ

渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不為

わたりもりふねわたせをとよぶこゑのいたらねばかもかぢのおとせぬ

和名抄云、海人云々日本紀云渡子和太之毛利一云和太利毛利とあるを、巻十八长歌に和多理母理とあれば、わたりもりとのみよむべし、わたせをとは、わたせよといふをひろく、巻七に氏河を船令渡呼跡よべどきこえざるらしかぢおともせず

真氣長河向立有之袖今夜巻跡念之吉沙

まけながくかはにむきたちありしそでこよひまきてんとおもへるがよさ

日久しく待こし袖をこよひまきなんとおもへるがよきなり

天漢渡湍毎思乍来之雲知師逢有久念者

あまのがはわたりせごとにおもひつゝこしくもしるしあへらくおもへば

こしくは来しくの延言、こしくもしるしとは、来しかひありしといふ事也、あへらくは

あふるを延ていふ

人左倍也見不継将有牽牛之嬬喚舟之近附往乎

ひとさへやみつがずあらむひこぼしのつまよぶふねのちかづきゆくを

人つぎてあらんは見てあらんやはの意也、是は牽牛の嬬女を舟よ

ておもひやるさまによめり

一云見乍有良武

天漢瀬乎早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛

あまのがはせをはやみかもぬばたまのよはふけにつゝあはぬひこぼし

渡りかぬるを見ていふ

渡守舟早渡世一年爾二遍往来君爾有勿久爾

わたりもりふねはやわたせひとゝせにふたゝびかよふきみならなくに

玉葛不絶物可良佐宿者年之度爾直一夜耳

たまかづらたえぬものからさぬらくはとしのわたりにたゞひとよのみ

たまかづら枕詞、さぬらくは相寝るを延ていふ

戀日者氣長物乎今夜谷令之應哉可相物乎
こふるひはけながきものをこよひだにともしむべしやあふべきものを
よまでこのかへしぞよめり
織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者将長
たなばたのこよひあひなばつねのごとあすをへだてゝとしはながけん
あすをとほしはだゝるの百をへぶそ、それよりまでのながらんといふ
天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡
あまのがはたなはしわたせたなばたのいわたらさんにたなはしわたせ
棚をわたせるが棚の如くなれバ棚橋と云、わたるのいは發語にて、織女のわたりまれ
よみかへり
天漢河門八十有何爾可君之三船乎吾待将居
あまのがはかはとやそありいづくにかきみがみふねをわがまちをらん

よみてこのほか八十隈今とよめり、三ハ借字にて御之
秋風乃吹西日從天漢瀬爾出立待登告許曽
あきかぜのふきにし日よりあまのがはせにいでたちてまつとつげこそ
天漢去年之渡湍有二家里君将来道乃不知久
あまのがはこぞのわたりせあれにけりきみがきまさんみちのしらなく
有を荒に借てあるからいでゝし、瀬のかはるより瀬かはりて、たえたるなり
天漢湍瀬爾白浪雖高直渡来沼待者苦三
あまのがはせゞにしらなみたかけれどたゞわたりきぬまてばくるしみ
彦星の後来り渡をとりて、待ハ織女の迎へ来るを待之
牽牛之嬬喚舟之引綱乃将絶跡君乎吾念勿國
ひこぼしのつまよぶふねのひきづなのたえんときみをわがおもはなくに
和名抄云唐韻云牽紋　巨奈天　挽船縄也とあれバ、ふねをひきつなぐつなをいふ

去ヲ出ニ誤

借ヲ惜ニ誤

むすびけるを、吾の下一本久の字あるハ、之の誤也
渡守。舟出為将去。今夜耳。相見而後者。不相物可毛
わたしもり。ふねでしいでん。こよひのみ。あひみてのちハ。あハじものかも
彦星のあふよ惜るを云、去を本出とあれ、一本ハよろしく改
吾隠。有擑。枠無而。渡守。舟将借八方。須臾者有待
わがかくせる。かぢさををなくて。わたしもり。ふねかさめやも。しバしハあらまて
織女の舟を隠さむ為也、擑枠をかくしてれバ渡さしも舟かるべきや、暫ハ
しバしまてよといふ、借を本惜に作る、又歴本によろしく改
乾坤之。初時従。天漢。射向居而。一年丹。
あめつちの。はじめのときゆ。あまのがハ。いむかひをりて。ひとゝせに。
両遍不遭。妻戀爾。物念人。天漢。安乃川原乃。
ふたゝびあはぬ。つまごひに。ものおもふひと。あまのがハ。やすのかはらの。

出出ハ歳ノ誤具ハ曹ノ誤

荒ハ荻ノ誤具ハ曹ノ誤

鳥ハ焉ノ誤

有通。出出乃渡丹。具穂船乃。艫丹裳舳丹裳。船装
ありがよふ。いでのわたりに。そほぶねの。ともにもへにも。ふなよそひ。
真梶繁抜。旗荒。本葉裳具世丹。秋風乃。吹来
まかぢしゞぬき。はたすゝき。もとはもそよに。あきかぜの。ふきくる
夕丹。天川。白浪凌。落沸。速湍渉。
よひに。あまのがハ。しらなみしのぎ。おちたぎつ。はやせわたりて
稚草乃。妻手枕迹。大船乃。思憑而。榜来等六。
わかくさの。つまでまかむと。おほぶねの。おもひたのみて。こぎくらん。
其夫乃子我。荒珠乃。年緒長。思来之。戀将
そのつまのこが。あらたまの。としのをながく。おもひこし。こひつくす
盡。七月。七日之夕者。吾毛悲烏
らん。ふみづきの。なぬかのよひハ。われもかなしも

いつひのいは發語、織女人は彦星をさして、出出は歳の字の誤なるべし
のわたりもあるか、よるまで年之度とよめり、具穂船の具は其の字なるべし
誤れるか、宣長は其の誤なるべしといへり、巻三にも赤乃曽保船とよめり、
くれなゐとよみしに從ひあれど、具を清音のそほにも用ひし例なく、また赤人
の歌にも神ふると渇ることなければ、ふらしむ、荒は荻の誤なるべし、神功紀に、幡
荻穂出吾也とあり、又或人は荒は篶木二字の一字に誤りたるべしといへり、
ぞもきのえべし、本業紫具世舟の具も、曾て其の誤なるべし、秋風のそよ
そよと吹るなるに、わか子の大舟の、枕詞、妻このまさし、此妻は織女をいふ、
こまのふは彦星をいふ、立てわたらんとは、立のかきりをまちてらんと
いふ、これもかすみし、谷下つ風まく共に像きくあれし、むなく、鳥一本馬ゐ

反歌

狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳将偲

こまにしきひもときかはしあめびとのつまとふよひぞわれもしぬばん
和名抄云、本朝式、有暈繝錦、高麗錦、軟錦、両面錦等之名、云々、
とあり、狛錦は此高麗錦なり、巻三倭文たまの帯解替てとよめり、
あまびとは彦星をいふ、古訓ひこぼしとあるはよむべくもあらず、此結句
もわつのまくしのづく

彦星之川瀬渡左小舟乃得行而将泊河津石所念

ひこぼしのかはせをわたるさをぶねのえゆきてはてむかはづしおもほゆ
さは發語なり、乏を毎く得行而と書るとんまでと訓べしと為ひそれきされたるの
よむべくもおぼえず、奥津の說によりてえゆきてはてんとよまん、巻十一面ゑ
ぶみも得為也く、などよめりといへるのと穏かなるを

天地跡別之時従久方乃天驗常豆大王

あめつちとわかれしときゆひさかたのあまつしるしとさだめてし

天河原爾。璞。月累而。妹爾相。時候
あまのがはらにあらたまのつきをかさねていもにあふときさもらひまつ
跡。立待爾。吾衣手爾。秋風之。吹反者。立坐。
とたちまつにわがころもでにあきかぜのふきしかへらばたちてゐて。
多土伎乎不知。村肝。心。不欲。解衣。思
たどきをしられむらきものこゝろねがえずときゞぬのおもひ
亂而。何時跡。吾待。今夜。此川。行長有得鴨
みだれていつしかとわがまつこよひこのかはの。

上ハ久方の天つ印と水無川をへだてゝ置し由、定ハ定の誤にて大王とてしの
うちは用ひたる借字なり、候ハさもらふとよみ、かうのぞかなたへんのおもむきをかんがえ
どちの何をうしなひて、宜ものハ欲ハ歡の誤にて、心不歡ハこゝろさびしくと訓
べしとらむ村きもの、ときゞぬの枕詞、行長有得鴨ゆきながくあらぬかも

と訓るハ何のゆゑしも行ハ待の誤にて、まもつてなぐあかえてんの
訓んこそ、前ハいはれつれど此川のとわたりつぎがたし、按ふ行ハこと
しと行也ハ誤れるにて、其のくハ由、ゆくを訓べしそれ得の上不の字を脱
せしにて、さらバあかずのあひにけりと訓べきを、猶考べし

反歌

妹爾相。時片待跡。久方乃。天之漢原爾。月叙經来
いもにあふときかたまつと。ひさかたのあまのがはらにつきぞへにける
片待ハ下待也。古のさまにてまあの河原にあまくまの月をかさねてまちゐ
るなり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan